イスラーム考

深草　　徹

日頃、我々になじみがなく、とてもわかりにくいイスラームについて少し首を突っ込んでみました。別に多くの文献を読みこんだわけではなく、井筒俊彦「イスラーム文化　その根柢にあるもの」（岩波文庫）、同「マホメット」（講談社学術文庫）だけを読んだだけですから全く初学レベルに過ぎませんが、無謀にも小論をまとめてみることを思い立ちました。上記の２冊の本は小冊子の部類ですが、著者の研究の深みを垣間見ることができ、またイスラーム研究にかける著者の情熱に触れることができる天下一級の名品です。それがこのような大胆な試みを思いつかせた理由かもしれません。

故井筒俊彦先生はご存知の方もおられると思いますが、世界的なイスラームの研究者で、イラン革命前にはテヘラン王立哲学研究所教授をされていました。西洋哲学、東洋哲学に通じた巨人です。

なお、以下の文章では最近の用語例に従い、イスラムをイスラーム、モハメットをムハンマド、コーランをクルアーンと表記します。

１　イスラームは、唯一・絶対・全能の人格神たるアラーの啓示がムハンマドの口をついで語られたという聖典クルアーンから全てが展開するとされているようだ。道徳も政治も法律もことごとくクルアーンから必然的に流れ出るもの、その解釈学的自己展開であり、聖俗分離は本来的にあり得ない。とりわけムスリムには語源的に絶対帰依者という意味があるごとく、アッラーと、契約により絶対服従の関係（主人・奴隷の人格的関係）を取り結ぶことによりムスリムになるというわけだから、クルアーンが彼の全てをつかんで支配するのは当然のことだ。

しかし、ここで一つの疑問がある。このような聖俗不分離はイスラームに特殊な問題なのかと。キリスト教でも、聖俗分離は元来なかったのではないか。キリスト教の教義、歴史に不案内な私には、少なくとも現象的にはそのように見える。３０年の長きにわたる宗教戦争に終止符を打ち、欧州にウエストファリア条約が成立したのは１６４８年。国家や戦争が聖の領域から俗の領域に移り行くのはこのあたりからだ。近代国際法の父グロチウスが活躍するのもこのころのことだった。もっともエンゲルスの「ドイツ農民戦争」で叙述されるように現世の利害・権力争いが宗教的争いの外皮をまとっていたに過ぎない、ようやくその外皮をかなぐり捨てるにふさわしい時期が到来したのだという解釈も成り立つのかもしれない。

イタリア・ルネサンスもキリスト教の胎内からの人間性・主体性の確立運動、その絶頂期は１５世紀から１６世紀だ。ともかくヨーロッパ・キリスト教世界でも、聖俗分離が進んで行ったのは中世の終わりを告げる時期であった。

では何がそうさせたのであろうか。当時の交易・産業、人々の生業、暮らし、人々の思想や思考・精神の中にそれ以前と剔抉すべきものが生まれていたに違いない。

時間的なことだけを言うと、イスラームは宗教として確立してからまだ１４００年弱、

キリスト教の歴史と比較すると、そろそろこれから宗教戦争の荒れ狂う時代を迎えるという時期にあたる。イスラームはまだ天地をひっくり返すような宗教的エネルギーが収束段階を迎えているとは言えないのだ。視点を変えて見れば世界の中心がヨーロッパに移ったことによる中心と周縁での文化の不均等発展の問題がある。

イスラームの聖俗分離は、ほっておいてもいずれ進んで行くことになるだろう。しかも、今、グローバルな世界の中で、かってないほどに聖俗分離を強制する力が働いている。イスラームの聖俗分離の過程では、中世キリスト教世界のような宗教戦争には至らないと思うが、教義と真っ向から対立するものだから大きな軋轢は避けられないことも確か。先進諸国は、自らの来たり来った過去を見据えて冷静かつ寛容に見守り、支援をする必要がある。

2　イスラーム諸国の近代化、工業化は立ち遅れている。その原因はイスラームの教義自体に存するのであろうか。これは聖俗不分離の応用問題だ。私は、そうした原因もゼロとは言わないが、ロシアを含む西欧列強の植民地・保護国として長い収奪の歴史を強いられてきたこと、或いはそれらの領土蚕食にあって国力を疲弊させたことが大きな原因ではないだろうかとも思う。とりわけ植民地・保護国では宗主国に役立つような産業構造や支配・権力関係（王権・独裁）が強制されたことが独立後もその母斑をとどめ、進歩・発展の足かせになっている。一部のイスラーム国の貧困は目を覆うべき状態である。イスラーム諸国では「構造的暴力」の真っただ中にあるようだ。それが強固なイスラーム原理主義、過激主義、テロの温床を形作っているのではないか。中心周縁文化不均等発展論の実体を探るとこの問題に突き当たるのである。

ここでイスラーム原理主義についての疑問を一つ提起したい。イスラームは、井筒先生によると、ムハンマドが、①メッカにいた１０年間のクルアーンに見られる教義、②メディナにヒジュラしてからの１０年間のクルアーンに見られる教義、③ムハンマドの死後にイランで勃興するシーア派の教義、④これもイランを中心とするスーフィー派と言われる分派の教義が典型的な類型として区分できる。①と②は渾然一体となってスンナ派の教義となるが、①ではアッラーの前に人が裸で対面し主人と奴隷の契約関係を取り結ぶ、そこでは恐ろしい終末、最後の審判への恐れ（タクワー）が人を支配する、アッラーは厳正で恐ろしい相貌しか見せない、実存的感覚をペシミズムが彩る、②では人はムハンマドを介してアッラーと契約関係を取り結び、同時に同胞たちと兄弟姉妹の契約を取り結ぶ、終末と最後の審判により示される天国はあくまでも甘味で美しく、アッラーは慈愛に満ちた語りかけをする、人々を支配するのは感謝（シュクル）。現世肯定的だ。②においてイスラム共同体（ウンマ）が成立、クルアーンの内容は、ウンマの規律、人々の日常生活での善行の基準、倫理、法律として語られたものとなる。これが聖法（シャリーア）と言われるものであり、学者階層（ウラマー）が司る。これはクルアーンの外面化、世俗化の道だ。このことが逆に内面化を意識的に追及する教派を生むことになる。③はクルアーンの内面化の道の一つ。最後の預言者ムハンマドは死んだが、それは

外に向かって啓示を伝える外的預言者のこと。クルアーンはシャリーアとして世俗化した。クルアーンの内面に沈潜してアッラーの真の声を聞き、これを伝える使命をイマームが新たに負うことになった。イマームは内的預言者だ。その内的預言者イマームの語りがクルアーンの内的真理（ハキーカ）。クルアーンは一種の暗号に過ぎない。ハキーカを引き出し、信徒を束ねるのはイマーム。単純化するとこれがシーア派の教義。聖俗再融合といったところか。教義を司る学者階層をウラファーという。④もう一つの内面化の道を行く一派のスーフィー派は、イスラーム神秘主義で知られている。シーア派ではハキーカの探求はイマームの専権であったが、ここでは広く内的真理・ハキーカに通じる能力のある者は全て探求することができる。このような人をワリーと言う。ワリーは、修行によりアッラーと対面し、一体化する力を獲得する。「我こそは神なり」が究極の姿となる。しかし、これは人格一神教たるアッラーの否定にもつながる。神を冒瀆するものとして排撃もされる。

さて現代のイスラーム原理主義とは、どのようなものであろうか。宗教の教義に忠実に従うということなら単なる宗教運動に過ぎないが、私は①に近づくと、過激派、テロリリズムを生むことになると思う。これは過激派・テロリズムの思想・宗教論的考察。社会的、実体的考察は前段で述べたとおり。

3　どうしてイスラームは７世紀前半にアラブ世界に勃興したのだろうか

これは魅力的なテーマ。歴史研究の成果を踏まえて議論するべきところだ。予断と偏見に基づいて大胆に私見を述べれば以下のとおり。

７世紀初めアラブは強固な部族的社会であった。宗教と政治的統治が一体であった当時だから当然部族ごとに神を持っていた。井筒先生はこの７世紀初めの無道時代（ジャーヒリーヤ時代）のアラブ世界を戦いと報復に明け暮れる砂漠の騎士道時代として描く。砂漠のベドウィン勇士である。その精神は、外面的には血の結合と敵に対する仮借なき闘争心、勇者のそれである。しかし内心の風景は、命の不安にかられた刹那的・享楽主義であると。このような精神的状況が真の救いを語るムハンマドを待っていたのだと言う。そしてムハンマドがイスラームを確立するや予想だにしなかったサラセン帝国への道が開かれたと。しかし、哲学・思想・宗教の門外漢である私にはこれは逆のように見えてならない。部族社会のアラブは、東方交易を通じて富を集積し、科学技術や文明において揺るぎない地歩を固め、まさしくサラセン帝国への道を歩みつつあった。その統一の旗印がイスラームだったのではなかろうか。イスラームは、セム族人格一神教、キリスト世界、ユダヤ世界共通の神が、最後の預言者を通じて語った啓示が聖典である。まさに当初から、部族を束ねるだけではなく、世界を束ねる世界宗教だ。

まことにロマンのない話になってしまった。

了

関連ノート１：宗教的倫理・エートスと資本主義の原始蓄積過程の関連に鋭いメスを入

れたマックス・ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」は刺激的です。この論旨を自分流に翻訳して現代の諸問題を考えるときのヒントにする必要があるなと思っています。

関連ノート２：北アフリカ、バルカン半島、アナトリア（小アジア）、肥沃なる三日月地帯、アラビア半島等旧イスラーム帝国（オスマン帝国）を構成した地域における戦争の火種である民族問題・ナショナリズム・宗教対立については山内昌之「民族と国家―イスラム史の視角から－」（岩波新書）ほか同氏の一連の著作の山があります。これからこの山登りを楽しんでみようと思います。